
夜に溺れて、月に縋る。

結木しぐさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜に溺れて、月に縋る。

【Nコード】

N58890

【作者名】

結木しぐさ

【あらすじ】

月が憎らしいくらい綺麗な夜。
今か今かと死ぬ瞬間を待っていた少女を拾ったのは酷く美しい男だった。

8年後、新しい出会いと共にそれぞれの想いが交差し、何かが少しずつが狂い始める。
優しさと残酷さが入り混じるシリアスストーリー

プロローグ（前書き）

連載休止中です

プロローグ

月が綺麗な夜だった。

都市化が進んだこの世界では珍しく、この場所には灯りというものがない。そのため、飲み込まれそうなほど深い黒の空に美しく輝く星たちがよく見える。

少女はぐったりと壁によりかかりながらその星たちを飽きることなく見つめていた。

いや、本当はとくに飽きていたけれど星を見る以外にすることがなかったのでそうしているしかなかったのだ。

もう3日ほど何も食べていないと思う。

少女は空腹と喉の渇きに苦しめられながら、もうすぐ来るであろう自分が死ぬ瞬間をここ数日間ずっと待っていた。

しかし待てど待てども意識は途絶えることもなく、途絶えたと思っただけで眠っていただけで数時間後には目覚めてしまう。そうしてまた襲ってくる空腹と戦わなくてはいけないのだ。

少女は自分のしづとさに苦笑するしかなかった。

さつさとこんな命なくなってしまうばいのに、どうしてこうも生きながらえているのだろう？

もう動く力もなくて、思考回路もばやけてしまって上手に考えることもできない。空腹や喉の渇きも限界を突破して麻痺してきたように思える。

言ってしまうえば今にも死にそうなのだ。

この状態がもう数日も続いている。それなのに死ねない。

空に浮かぶ月があまりにも綺麗で嫉妬した。

わたしもあんな風に綺麗に産まれてきたかった。こんな泥に塗れ、傷に塗れ、まともに生きられないのなら死んだほうがまだ。

そう思って死のうとしているのに、本当に世の中残酷にできているなと思う。

少女は静かな呼吸を繰り返しながら、ただ待つ。

あと1時間もすれば夜は明けるだろう。

いったいあと何日間この状態が続くのだろうか？

早く死にたい。

早く楽になりたい。

神様がもしいるとするなら、最後の願いくらいかなえてくれればいいのに……

少女そう思いながら目を閉じた……その時だった。

何かが叩きつけられるような強烈な音が響き渡ったのだ。

少女はびっくりした目を見開き、瞳だけキョロキョロと動かして音の原因をさがす。

この場所人通りもほとんどなくて、昼間になつてもこの道を通る人なんてめったにいない。少女がこの場所に来てからここを通った人間はたったの3人だった。

その3人とも、少女の姿をチラリと見はしたもののそ知らぬ振り

をして通りすぎていったのだ。

少女はキョロキョロと辺りを見回すが音の原因は一向に見つからない。空耳かとも思ったが、かなり大きな音だったのでそんなはずはない。

しばらく周りを見回していると、もう一度あの強烈な音が響き渡った。

それと同時に、小脇の道から何かが吹っ飛んでくるのが見えた。少女は霞んだ視界の中、なんとかそれを見ようと目をこらす。しかし、少女がそれを識別する前に何かが吹っ飛んできたのと同じ方向から人影のようなものが出てきた。

人影は飛んでいったものにゆっくりと近づくと、手に持った何かをゆっくりと持ち上げる。

少女はそれが拳銃だとわかって驚愕した。今の世界拳銃を持ち歩く人間はたくさんいるが実際に使っているところを見たのは初めてだったのだ。

そうして少女は、そのとき初めて吹っ飛んできたものが人であることを理解した。

人影は銃口をぐつたりと倒れて動きもしない男に向け、躊躇もなくその引き金を引いた。

空気が破裂するような音が響き、時間が止まったような感覚が少女をおそった。

自分は大変なものを見てしまったと思い、今すぐにも逃げ出したいのに、身体は言うことを聞いてれず動くことができない。

少女はどうすることも出来なくて、ただただその人影と倒れた人間を見つめていた。

しばらくそんな時間が続き、ふと人影がこちらを向く気配がした。少女はビクリと肩を震わせ、身を固める。

人影はしばらくこちらを眺めていたが、次の瞬間ゆっくりとした足取りでこちらに向かってきた。

殺される。

少女は瞬時にそう思った。今の光景はどう見ても“見てはいけなもの”だった。それを見てしまったのだから殺されてもおかしくない。

よかったではないか。これ以上空腹や喉の乾きに耐えながらいつ来るかもわからない死期を待つよりも、誰かの手によって殺されたほうが手っ取り早い。

願ってもなかった状況だ。大人しく殺されよう。

そう思おうとするのに、どうしてだろう？

少女は身体の震えが止まらなかった。急に訪れた“死”の瞬間に恐怖を覚えたのである。

なんとか身体を動かそうと力を入れてみるが、全くと言っていいほど動かない。

少女は悲痛な気持ちになった。

人影は、少女の気持ちなど知りもせず少女の前で足を止める。そこで少女は初めて人影の正体が男であることが分かった。それも酷く美しい男……。

夜風に揺れる髪は空と同じ漆黒で、瞳は鮮血のように赤い。髪と同じ漆黒のコートを靡かせて男は少女を無表情に見つめていた。少女もまたその男を見つめ返す。というよりもあまりの恐怖に動けなかったのだ。

しばらく無言の時間が続くが、最初に動いたのは男だった。

ぐったりと壁にもたれかかりながら自分を見つめてくる少女にしゃがんで視線を合わせてくる。

「何をしている？」

その声は思った以上に低かった。

少女は男を見ながらその瞳に敵意がないことを悟る。そのことに少し安堵した。

しかし男が手に持っている銀色に光る拳銃が今だ彼女に緊張感を与える。

「聞いているのか？」

なかなか答えない少女に男は少し声色を強めて言う。

少女は慌てて男に返事をしようと口を開くが、喉が張り付いたような感じがして声がでなかった。パクパクと小さく口が動き、空気がスウスウと流れるだけである。

男は金魚のようにパクパクとし続ける彼女を不思議そうな顔で見
て、

「しゃべれないの？」

そう聞いてきた。

少女は首を動かす力もなく、ただ何もせず男を見つめる。

「……親はどうした？家は？」

男はしばらく黙っていたが、少しすると少女にそう聞いてきた。しかしその言葉にも少女は答えることは出来ず、そのまま男を見つめる。

男はまたしても無言になり少女を見つめてきた。

この男は一体何がしたいのだろうか？

少女はそう思いながら男をみつかえず。殺すなら早く殺してほしいし、その気がないのならさっさと立ち去ってほしいと思う。

自分といたって何も楽しくないだろうに……。

そんなことを思っていると、フイに頭に温もりを感じた。それがこの男の手だと気付いて少女は驚きに目を見開く。

男は少女の髪を撫でていたのだ。

何が起こっているのかさっぱりわからない少女をよそに、男は2・3回少女の髪を撫でるとそっと少女に抱き上げる。

本当に分けが分からず目を見開いたまま男を見つめる少女を、男はじつと無言で見つめてきた。

男の赤い瞳と少女の黒い瞳が交差して、少女は時間が止まったような感覚をおぼえる……

「俺のところに来るか？」

それは……月が憎らしいくらい綺麗な夜だった。

ブログ（後書き）

読んでいただきありがとうございます

こちらはメインの投稿ではありませんので更新は気まぐれとなります。

日常 - 1

目を覚ますと、カーテンの隙間から日の光が差し込んでいて
思わず目を細めた。

少女はうーんと伸びをした後ベットから降りる。

ふんわりとしたシルエットの白い絹で出来た服は肌触りが最高に
良くて見ただけで高そうだと分かった。こういう服にはだいが慣れ
たがフツとした瞬間、自分がこんな綺麗な服を着ているのはあまり
にもおかしいと思い恐怖を感じることもあった。

部屋を見わたせばどこかのご令嬢のように部屋のようにうだと思う。

これが自分の部屋だとは今でも思えない。

ベットはフリルとレースがふんだんに使われた天井つきのもので、
ベットのの上には可愛らしく大きくまのぬいぐるみが置かれている。
部屋にある家具は全て白で統一されていて、所々に淡いピンクが混
じっていた。カーテンも絨毯も肌触りの良いずいぶん高そうなもの
を使っている。

この部屋にあるものは全部、少女の保護者となる人間が用意して
くれたものだ。

こんなにも可愛らしい部屋に住むことになる日が来るなんて少女
は夢にも思っていなかった。

ドアを開けて外に出ると、リビングに繋がっている。

リビングに行けば良いにおいが立ち込めていた。どうやら彼が朝
食を作っているところらしい。

少女はゆつくりとした足取りでキッチンに向かった。すると黒いシャツを着た黒髪の男がそこにたっている。男は少女の気配を感じ取ると後ろを振り向いた。

男の赤い瞳と少女の黒い瞳が交差する。すると男は小さく笑った。

「おはよう、ちい」

言われて少女はにっこりと微笑んだ。

「今出来たところだ。食事しよう」

少女は頷いて、いつもの席に着いた。

少しすると、彼は両手に食事を持ってわたしの前の席に腰を下ろした。

「昨日はよく眠れたか？」

男の言葉に少女はコクコクと頷きながら笑みを見せる。

「そうか」

その後は会話もなくただ黙々と食べるだけが別に苦ではない。むしろ会話をするほうが難しいのだから……。

少女はしゃべれない。

わけではないがしゃべることが出来ないのだ。

彼はわたしがしゃべれないと思っている。

そしてだからこそこの場にわたしがいることを許してくれているのだ。

8年前……

少女がまだ6歳だった頃、少女はこの男……レイという名のこの男に拾われた。

あの頃の少女は数日も飲まず食わずだったためのどが張り付いて、レイが話しかけてきても返すことが出来なかったのだ。

そのことからレイは少女がしゃべれない思い込んでしまったらしい。少女がしゃべれるようになったのはレイに拾ってもらった3日後のことだ。

その頃にはしゃべれるようになったと言うこともできず、それから8年間少女はしゃべれない振りを続けてきた。

ちいという名前はも少女の本当の名前ではない。ここにきて1週間くらいした時にレイが付けてくれた名前だった。

小さいからちいという単純な名づけ方だがそれでも少女は心から嬉しいと思ったことを今でも忘れるはしない。

サツキという名が少女の本当の名前であるが、その名前を呼ぶ人間はもう少女のことをサツキと呼ぶ人間は少ない。近所に住む人間はきつとちいが名前であると勘違いしている。

ちいが本当の名前でないとしてっているのはサツキ自信とレイだけだろう。

「今日は仕事がある」

食事を食べ終わるとレイは食器を固唾毛ながらそうつた。サツキはその横で片付けの手伝いをしながら頷く。

別にいつものことだ。

レイは夜になると仕事に行く。そして帰ってくるのは早くて朝方で、遅いときは何日も帰ってこない。だからと言ってサツキは文句を言うことなど出来ない。

「明日の夜には帰ってくる予定だ。それまで待ってろ」

レイはサツキに優しい声色でそういった。

サツキはにつこりと笑いながら頷く。そして思いついたように壁にかけてあったホワイトボードを手にとるとそこに何か書き込んだ。

レイは不思議そうにしながらサツキが書き終わるのを待つ。

しばらくするとサツキはホワイトボードをレイをに向け、ふんわりと微笑んだ。

『怪我しないよう気をつけて』

その言葉を読んでレイは少しだけ笑みをこぼす。

そしてサツキの頭を2、3回ほどぐしゃぐしゃ撫でるとそのまま抱き上げた。

「ありがとな」

頬を寄せてぎゅっと抱きしめられる。

サツキはその温もりが心地よくて目を瞑った。

きっとレイは自分のことを人間だとは思っていないのだろう。

サツキはよくそう思う。

レイはしゃべれないわたしをペットのように思っているんだと思う。レイの行動の所々にそんなことを感じるのだ。

だけど、それでも構わないと思った。

こうして生きていられてサツキは幸せだと思う。

8年前のあの日、死ぬことしか選べなかったわたしを助けてくれたのはレイだった。そのレイがしゃべれなくて、レイのことを責めたりもしない。傷つけたりもしない存在を求めているのならサツキはそういう人間になろうと思う。

だってあの日……

「俺のところにくるか？」

そういったレイの言葉に、最後の力を振り絞ってまで頷いたのは自分自身なのだから……。

日常 - 2

今夜は新月のようだ。

サツキは空を見上げて、フーっと白い息を吐く。

「ちい」

名を呼ばれて振り向くと、黒いコートに身を包んだレイの姿が目に入った。そろそろ出発の時間らしい。サツキは立ち上げるとレイに駆け寄った。

「今夜は寒くなる。あまり外に出るな」

そう言ってサツキの部屋のクローゼットから取り出したのである。上着を肩にかけてくれた。サツキはその上着がずれ落ちないように手で支えながらニコリと微笑む。

そしてクイッと彼のコートを引っ張りながらありがとぅと口パクで言った。

「気にするな」

レイは少しだけ目を細めてぐしゃぐしゃとサツキの頭をなでる。レイが手を離すとサツキはグシャグシャになった彼とおそろいの黒髪を手で直した。

そんなサツキの姿を横目に彼は脇においてあった少し大きめの鞆を持上げる。

「じゃ、行つて来るな」

サツキにそれだけ言うつとレイはコートを翻しながらサツキを振り返らずに玄関へと向かった。

コートがめくれた瞬間、銀色に光るアレが目に入って少しだけ昔の光景を思い出したがサツキはすぐにそのことを胸の奥にしまう。

しばらくすると玄関のドアが閉まる音が聞こえた……

レイと一緒にいると決めたとき、サツキはレイのことを極力知らないようにしようと心に決めていた。それがレイと一緒にいる絶対条件だからだ。

サツキが知っっているのはこの部屋にいるときのレイだけで、この部屋から出たレイを知ることが許されない。

だからサツキはレイのことをほとんど何も知らない。レイと言う名前もこの部屋に来た客人が彼をそう呼んでいたから知ったのだ。それまでレイは自分も知らなかった。

もつともそれが本当の名前であるかどうか知らないのだが……

名前の他にサツキが知っっていることと言えばレイが好きな食べ物と嫌いな食べ物、それから好きな色と嫌いな色。人の温もりがあると安心すること。夜にほとんど眠れないこと。そんな一緒に生活しているからなんとか分かる些細なことだけで、外にいるレイのことはほとんど知らない。

知りたいと思うときもある。仕事に行くと言うレイの後についていこうかと思つたときもある。しかしそんなことしても無意味だと知っているからしない。

あれはまだここに来て名も無い頃のことだったと思うが、この部屋に一人で残されるのが嫌でレイについて行ったことがあったのだ。そのときはこの部屋を出てものの数分でレイに見つかり部屋に連れ戻された。

寂しいのだと言うことを伝えるとその日はそばにいてくれたが、朝起きたときにはレイはいなかった。

そしてその次の日にはサツキの部屋に外側からかけることができない鍵が付けられのだ。

サツキがついていこうとすると鍵を閉めて、ついてこられないようにする。

そんなことが続いてサツキは一人家で待つ寂しさに慣れてしまい今もその鍵はついているものの使われることはない。

今は寂しさからつけようなどと思わないが、彼を知るためにつけて行きたいと思うことだってある。しかしつけていったところすぐにつかまって、部屋に閉じ込められるだけだからつけたりしないということだ。

サツキはレイが出て行ったあと、しばらくは自分の部屋でゆっくりと過ごしていた。

サツキの部屋のとなりには大きな書庫のような部屋があり、難しいものが多いが中には物語のようなものも置いてあって、サツキはそれを読むことが多い。

他にもレイが買ってきてくれた本があるので暇をすることはない。

もちろんTVもこの部屋には置いてあるのだが、サツキはあまりTVが好きではないので見るものがなかった。

本を読み始めて2時間ぐらいした頃、サツキは顔を上げ時計を見た。

そろそろかと思い、クローゼットから温かそうな服を引っ張り出して身につけると、レイが買ってくれた携帯電話だけ持ってサツキは家をでた。

夜ということもあって、外の風は冷たい。サツキは手をすり合わせてハアアッと息を吐いた。

その足は止まることもなく目的の場所に向かう。

人通りの少ない道をしばらく歩くと遠くに人に声が聞こえてきて建物の光は目に入った。

都市化が進んだこの町のメインストリートは夜でも明るく人が賑わっている。酒のせいで酔っ払う人々をサツキは可憐に避けないが歩き続けた。

しばらく歩くとサツキはある見せの前で足をとめる。きらびやかな看板には『M a r i a』と書かれていた。

サツキは少し怪しげな雰囲気を漂わせるその店の扉を躊躇もなく開け放つと中に足を踏み入れた。

酒と香水の匂いが立ち込める店内。人の笑い声がうるさいくらい聞こえてくる。

「おっサツキじゃん！いらっしやい」

店のカランカランというベルの音に気付き、こちらに目を向けたウェイトレスの男がこちらを見た。赤毛の髪がよく似合う活発そうな男の子である。

彼はサツキの姿をとらえると深い緑の瞳を細めながらクシャッとした笑みを見せた。

「こんにちは、リック」

サツキはそう言いながら笑みを見せる彼につられるように、にっこりと微笑んで見せた。

日常・3

「おうつ。リラさんサツキが来たぜ」

リックはサツキの挨拶に笑顔で答えると奥のカウンターで客たちとにこやかに話す女亭主の名を呼んだ。

リラはその声に気がついてこちらをみる。

「あらサツキ。今日はずいぶんと遅かったじゃない」
「そう?。」

いつもどおりの時間にきたと思うのだが……そう思って店にかけてある時計を見るといつもより30分くらい来るのが遅かったみたいだ。

「まあいいわ。サツキこっちにいらっしやいよ。リック! アンタは立ち止まってないでさっさと働きなさい!」
「たつく……はいはい」

リックはめんどくさそうに返事をするとう事に帰った。
サツキはそんなリックの後姿をみてクスクスと笑いながらカウンターへと向かう。

「おうサツキちゃん、今日も可愛いね」
「サツキちゃん、新しい絵が完成したんだ後で見てくれよ」
「あとでこっちのテーブルにも遊びに来いよ、サツキちゃん」

所々でその声をかけられてサツキはその全てに始終笑顔で答えて

いった。

カウンターにつくと迷わずリラの目の前の席に座る。

「今日もチェリージュースでいいかしら？」

「うん、おねがい」

そう言えばリラは後ろを向きチェリージュースを作り始めた。

「サツキちゃんっていつもそれだよね。たまには違うの飲めば？
酒とかさ」

となりに座っていた男性客がそう言って自分の持っている酒を傾ける。

「わたしお酒苦手ですから」

サツキはニコリち笑ってその言葉に答えた。

この世界は基本的にお酒を飲むことに制限がない。そのため子供が酒を飲もうが誰も何も言わないのだ。しかし飲んでもいいからといって飲めるわけじゃない。

サツキはお酒を極力飲まないようにしていた。

「こら駄目ですよ。サツキは純粋な乙女なんだから、お酒なんて飲んでたらイメージ狂っちゃうでしょ？」

細い指でチェリージュースを持ったリラがお客さんに向かって笑顔で怒る。お客はごめんごめんと言いながらケラケラと笑った。

「はい、サツキ。チェリージュースよ」

そう言って、サツキの目の前に透明な赤い液体のジュースが置かれる。上には本物のさくらんぼがトッピングされていた。

サツキはグラスを手につとその赤いジュースをゆっくりと口に含む。甘酸っぱい味が口に広がって喉を流れていった。

チェリージュースと言ってもこのジュース自体にさくらんぼが使われているわけではないらしい。ただトッピングにさくらんぼを使っている、色が似ているからという理由でチェリージュースと名づけたのだとリラが言っていた。

「そういえばサツキ聞いた？」

しばらくチェリージュースの味を味わっているとリラが思い出したようにそういった。

「何の話？」

そう聞けば、リラはニヤリと妖美な笑みを浮かべる。

「実はね、最近この辺に殺し屋が現れたんですって」

その言葉にサツキはビクリと肩を震わせた。

頭に浮かんだのだ誰でもない彼だった。

黒髪に赤い瞳を持った……大切な人。

「なんでも、すつごく綺麗な金髪の男だそうよ。ふふふ、一度会ってみたいわね」

リラはそう言って真っ赤な爪を唇にあてた。

金髪……ということは彼ではない。

サツキはそう思って安堵した。

「あら？あんまり乗ってこないわね。他の女性たちに話をしたら大盛り上がりだったのよ？」

リラはそう言って不服そうな顔をする。

サツキはそんなこと言われたって……と困った顔をした。

「まあ、サツキってどうもこういう話に疎いのよね。好きな人くらいいるでしょう？」

言われてサツキは真っ先に彼のことを思い浮かべた。

サツキのことをとても大事にしてくる彼。

「あら？冗談のつもりで言ったのに実は本当にいたりするの！」

リラは楽しそうに声を上げた。

本当にリラはこういう色恋の話が大好きだ。

「確かに好きだよ。きつと世界で一番大好き。でも……」

「でも何？まあ、サツキからこんな話が聞けるとは思わなかったわ！ー！」

身を乗り出して心底楽しそうにいうリラに少々呆れてしまう。

そういう話ではないと言うのに……

「大好きだけど、それが恋かと聞かれたら分からない。大切だと愛しているかと聞かれたら答えられない」

本当に好きだし、大切に思ってる。

自分を拾ってくれたことには感謝してる。ずっとそばにいたいと思う。だからこそ彼のペットのような存在になっても構わないと思うのだ。

だけど、恋や愛が入っているかはサツキ自信にも分からなかった。

「なんか複雑ね……」

リラはわたしの言葉を聞いてリラは熱が冷めたかのように、乗り出していた身を元に戻した。

「リラさんはいないの？好きな人」

わたしは話をそらそうと思いそう聞いた。

しかしそれは失敗だったなと思う。リラの表情に陰りがでたからだ。

「いるわよ。人生投げ出してもいいくらい好きな人」

小さく呟かれた言葉に微かな狂気を感じる。

そのときいつも妖美に微笑んでいるリラはどこにもいなかった。

しかしそれも一瞬のこと

直ぐにいつものリラに戻り、にんまりとした笑みを浮かべる。

「もお何言わせるのよ！わたしの話はいーの。あっそうだリックの恋話も着たことないわね。このままノリで聞いちゃいましょ。リックくほらちよつとこっち着なさい！」

その後、リラに好きな人はいるのかと聞かれて真っ赤になってし

まったくリックにリラの牙が向き、可哀想になるくらい質問せめにされていた。

そうやって、今日も夜は更けていく。

誰かの寝息が小さく響く店内でサツキは足音を立てないようにそ
おと店を出て行くつもりでいた。

結局リックの質問攻めは朝まで続き、どんな子なのか、どうして
好きになったのか、どこで出会ったのか、どこまでいったのかなど
など永遠と質問攻めにされていた。

どうやらリックはその子にまだ告白してないらしく、それを聞
いたリラがそんなんでは駄目だ！と言って、イマドキの男は消極
的すぎると嘆いていた。

いつの間にかお客さん全員でリックとその子をどくどくつけるか
という話になり、大いに盛り上がったってしまったのだった。

「帰るのか？」

ドアノブに手をかけられたところで、小さく声をかけられた。振
り返れば昨日の主役のリックが少し眠そうな顔をしながら後ろに立
っていた。

「うん。そろそろ帰らないと」

家に帰る頃には昼になってしまふ。彼は夜には帰ると言っていた
のでそろそろ戻っておかないといけない。彼の予定が早まるなんて
ことはよくあることだ。

別に出かけていたことを怒られはしないが、前彼より遅く帰った
とき随分と心配されたのであまり心配をかけてたくないのだ。

「そつか。気をつけて帰れよ。また来いよな」

「ありがとう。リックはもう少し眠った方がいいと思うよ。昨日の質問攻めで疲れてるでしょう？」

からかうように言えば、リックはまたしても真っ赤になってしまった。

「あ〜うん。そうする……」

なんだか歯切れが悪いなと思いながらもサツキはそこまで気にすることなくリックに笑顔を向けた。

「それじゃあね。また来るよ」

「おう。またな」

手を振り店を後にした。

外に出ると冷たい風が容赦なくサツキを吹き付ける。

サツキは自分を抱きしめながら、家までの道を歩き出した。

早足で家まで向かい、もう直ぐで家に着くというときだった。

背後からお腹の辺りに手が回され、そのまま抱き上げられる。

「……っ」

とつさに叫びそうになったが、微かに視界に入った黒髪がそれを制した。お腹に回された腕の感触と温もりをサツキは知っている。

急に抱き上げられたことでバランスを崩しサツキをその人物はき

ちゃんと支えてくれた。

足が宙ぶらりんの状態のまま、サツキは首だけ後ろに振り向くとそこには見慣れた赤い瞳がある。

サツキはそのことに安心してふんわりと微笑んだ。

「寒いから余り出かけるなと言ったのに……」

サツキを抱き上げた人物はそう言って少し不機嫌そうな顔をした。いつてもほとんど無表情に近い。

「寒かっただろ？」

少し心配そうにサツキを見るレイに、サツキは軽く首を振ってそんなことはない意思表示をした。

「だが身体が冷えている。早く家に行こう」

レイはそう言ってサツキを抱え直すと家までの道を歩き出した。サツキはそんなレイの肩口に頬を寄せ、そつと息を吐く。温かい温もりが冷えた身体を温めてくれた。

レイは基本体温が高い。見た目はとても冷たそうなので、初めてレイに触れたときは思った以上に温かなレイに驚かされたものだ。

しばらく歩くとサツキとレイが住むマンションのエントラスにつく。

レイはサツキを抱えたまま器用にオートロックの鍵を開けると、中に入っていった。

「あつ、ちょっと待ってくちょうだい」

エレベーターに乗り込み扉を閉めようとすると少し年老いた女の声が聞こえた。このマンションにすむ人の一人だと二人とも知っていたのでそのまま彼女が到着するのを待つ。

「ごめんなさいね。ありがとう」

女は、そう言つて笑顔を見せた。

レイはそんな女に構うことなく閉めるのボタンを押し、その後自分たちが住む１３階のボタンを押した。もちろん女の住む８階のボタンも忘れずに押す。

女はその光景をみてもう一度嬉しそうに笑った。レイは基本的に住民と会話をしないので嫌われているのでは？と女は心配していたのだ。住民とは温厚な関係でいたいと望む女としてはそのことは何とも嘆かわしい。

だから、自分の住む階をレイが覚えてくれていたことが純粹に嬉しかった。

「今日は寒いですね。あら、お嬢ちゃんお顔が赤いけど大丈夫？」

寒さにより、サツキの顔をはほんのりと赤く染まっていた。サツキは大丈夫だと言うように頷いてみせる。

この女もサツキがしゃべることは出来ないと思い込んでいた。

「それにしても、本当に仲の良い兄妹ね。羨ましいわ」

女はレイの腕に安心しきったように抱かれるサツキと、そんなサツキを大事そうに抱えるレイを見てうつとりと目を細めた。

サツキはそんな女の言葉に曖昧に微笑むだけである。レイは何も反応しなかった。

このマンションに住む人間はレイとサツキが年の離れた兄妹だと思っっているようだ。別に二人の顔が似ているわけではない。むしろレイはかなりの美形であつたが、サツキは別段美しくもない、なんとも普通の娘であつた。しかし、二人には大きな共通点があつたのだ。

夜のように深く暗い黒髪……

度重なる遺伝子組み換えによりさまざまな髪色を持つて生まれてくるようになったこの世界で、黒髪と言うのはなかなか珍しいものであつた。

ちなみに女の髪は可愛らしい桃色であり、若い頃は自慢であつたが年をとると少し恥ずかしくなつて、今では悩みの一つとなつてしまっている。

珍しい黒髪を持った二人をみな兄妹だと勘違いしていた。

レイは別にそのことを否定しなかつたのでサツキも何も言えずにいる。

とその時、エレベーターが止まる音がした。どうやら8階に着いたようだ。

「あら、それじゃあね。二人とも」

頭を下げながら出て行く女にサツキは笑顔で頭を下がしたが、レイは無表情に視線を女を見るだけだつた。

サツキとレイが住む13階に着くとエレベーターは止まった。

レイは無言のまま降りると玄関へと足を進める。このマンションは一階に一部屋という何とも豪華なマンションで、サツキは初めてここに来たとき驚愕した。

サツキが知る“家”は狭くて汚くて、雨が降ると雨漏りがあるためバケツが必要になるようなボロ屋だったからだ。

カード型のキーで鍵をあけるとレイは玄関に入った。広い玄関はそれだけでサツキの知る家と同じくらいの広さがありそうだ。それほどこの家は豪華で大きい。

サツキは靴を脱ぐためにレイの腕からスルリと降りると、靴を脱ぎ、リビングへと向かった。

「ちい、先に風呂に行つて来い。その間に食事を作っておく」

元からそうするつもりでいたサツキはレイの言葉に頷くと、自分の部屋の扉を開けて着替えを取りに向かった。

この家はバスルームも無駄に広い。

浴槽はサツキが2人いて足を伸ばしたとしてもまだ余りそうなくらいだ。

温かいお湯に身体が温まるのを感じながらサツキはリラの話を思い出していた。

“金髪の殺し屋”だと言っていた。いったいこの町に何をしに来

たのだろうか？

基本的に一つの町に殺し屋は1人から2人いる。まあこれは“良
い殺し屋”の話だが……。

殺し屋にも二つの種類がある。分かりやすく言えば良い殺し屋と
悪い殺し屋がいるということだ。

基本的に良い殺し屋と呼ばれるのは、町で正規に雇われた人間で
あり、悪行を働いた者、罪を犯した者、町の偉い人間がこの人間は
不要だと判断した者を依頼されて殺すのが仕事なんだそうだ。

街から必要のない人間を消すのが仕事のため町の人間からは英雄
のような扱いを受けている。もちろんそれなりにお給料も弾んでい
るとのことだ。

一方悪い殺し屋と言われるのは、金を積まれればたとえどんな人
間でも殺すような殺し屋のことをいうらしい。こちらは町の人間か
ら恐れられる存在だ。

サツキに言わせて見ればどちらもやっていることは同じ“人殺し”
なのにどうしてこうまで扱いが違うのか分けが分からない。

そしてレイは……

そこまで考えてサツキは自分の考えを打ち切った。

ちゃぽんと音を立てながら浴槽から出ると、シャワーを出す。そ
の温かいシャワーを冷たいものに切り替えると頭からそれを浴びて
頭を冷やした。

あれほど自分に外のレイについては考えるなど言い聞かせている

のに……

サツキは自分の行動に恥ながらシャワーを浴び続けた。

「冷たい……」

風呂から出てきたサツキの頬に触れたレイは少しだけ顔をゆがめてそう言った。サツキはその言葉に苦笑するしかない。

「ちゃんと入ってきたのか？」

怪しむようにそうと聞いてくるレイの手をさりげなく払うと、にっこりと笑って頷きながらごまかした。

レイはまだ少し言い足りなさそうだったが、サツキがお腹がすいたというようにテーブルを指差すと仕方がないというように食事にしてくれる。

やはりレイは優しい。

「そういえばちい、明後日は客人がくる」

食事を食べて少しすると、レイがそういった。

この家に客人が来ることは少なくない。それはレイの仲間と思われる人がほとんどだ。レイへの仕事の依頼に来る人間はこの上の階へと招かれる。レイはこの13階のほかにも上の14階と下の12階の所有権を持っているのだ。

「お前も会ったことあるヤツだ。銀髪に青い瞳の……憶えているか？」

言われてサツキは一人の人物の顔を思い浮かべた。
そして憶えているという意味をこめて頷いてみせる。

「そうか。実は明日仕事が入っていてアイツが来る前に帰ってこられるか分からない。出来ればアイツがきたら家に入れてやってほしいのだが」

そういうことが……。

サツキは分かったというように頷いてみせた。

「すまない、なるべく早く帰ってくる」

表情は無表情のままだが、声色が本当に申し訳なさそうなので、サツキは気にしないでいいよというように笑顔を見せた。
するとレイも少し安心したような口元を上げる。

そこで会話が途切れて、また無言の食事が始まった。

だがしばらくするとレイは唐突に視線を上げる。
サツキは不思議そうな顔をしながらレイの視線を辿った。その視線は窓の外を見ているようだ。

今日も月は見えないな……

サツキは少し残念な気持ちになった。

「今夜は寒そうだな」

レイとサツキはしばらく窓の外を眺めていたが、唐突にレイが呟くようにそう言った。

そうだね、という意味をこめてサツキは頷く。

すると赤い瞳がこちらをとらえて、黒髪がサラリと揺れた。

「一緒に眠るか？」

サツキは少し驚いたように目を見開いたが、すぐに嬉しそうに微笑んだ。

そしてその笑顔のままコクリと大きく頷く。

「そうか……」

レイも少しだけ嬉しそうだった。

その日の夜、サツキはレイの腕に抱かれながら眠りについた。
温かなレイの体温のおかげで寒さを感じることはない。

今夜も何事もなく夜は更けていく。

この優しい日常が永遠に壊れませんよにとサツキは小さく願った。

金髪の男 - 1

寒さに目が覚めた。

サツキは目を開いてあたりを見回してみても、そこが自分の部屋でないことに気がつく。黒で統一された冷たい部屋。

そこはレイの部屋だ。

そういえば昨夜はレイと一緒に眠ったのだった。

そのレイはもうそばにいない。彼が眠っていた温もりもそこにはなかった。

ベットから起き上がりリビングに行く。

するとそこにはラップのかかった朝ごはんの手紙が置いてあった。

そこには乱雑な字で仕事に行つて来るとだけ書かれている。

サツキはその手紙に軽く目を通すと、テーブルに戻し時計を確認した。随分と眠ってしまったようでもう昼間だ。

やることもないし暇なのでMariaにでも行こうかと考えたサツキは自分の部屋に入るとクローゼットから服を引っ張り出して、真っ黒なワンピースを身につけた。

サツキが持っている服は基本的に黒が多い。それはレイが買ってきてくれているからレイの好みが出ているのだと思うが、もう少し明るめの服がほしいなと思う最近だった。

しかし文句など言えるはずもない。

ラップのかかったご飯をレンジで温めて黙々と食べた後、サツキ

は外へ出た。

昼間だと言うのにまだ寒い。

もう一枚くらい着てくればよかったとサツキは後悔する。

メインストリートにつくと、夜と変わらず人が賑わっていた。

酒を飲んでいる人もいるらしくフラフラとした足取りでサツキに近寄ってくる者もいたがサツキはいつものようにそれら淡々とかわしていく。

「あれ……サツキ？」

もうすぐでMariaにつくというところで名を呼ばれて振り向くとそこにはリックの姿があった。

「こんにちは、リック」

「ああ、こんにちは」

リックは間の抜けたような返事をしながら道行く人をすり抜けてこちらに近寄ってきた。

「昼間にいるなんて珍しいな。店に来るのか？」

「うん。やることなくて暇だったから」

そういえばリックは少し申し訳なさそうな顔をした。

どうしたのだろうと首を傾げればリックが言いにくそうに口を開く。

「わざわざ来てくれたのに何だけど、今日はリラさんが急用だからで出かけちゃったから店はしまってるんだ」

「なーんだ、そっか……」

サツキはがつくりとして肩を落とした。
しかし亭主がいないのではしょうがない。

「わかった。今日は帰るよ」

「ああ悪いな。俺もこの後用事があつてさ……送つてやれないだ」
「うん大丈夫だよ。わざわざありがとう」

サツキは手を振りながら元来た道を帰りだした。

リックも少し名残おしそうにしながら手を振ってくる。

今日は少しついてないな……

そう思いながらサツキは人を避けて歩き続けた。

少し歩くとメインストリートから外れて人通りが少ない道にたどり着く。

この道は早歩きで歩く習慣がついていた。メインストリートとサツキが住むマンションの間にあるこの道はあまり治安が良くない。
ゆっくり歩いていたらそれだけ危険も高まるというものだ。

いつもならサツサと通つてしまふ道。だが今日はいつもと違つていた。

慣れた道のりをスタスタと歩き続けていたサツキの目にフツと見慣れないものが目に入ったのだ。

暗い路地裏、そこに何かがある。

サツキはそれにつられてついつい足を止めてしまった。

よくよく目をこらして見てみるとそれが人であることが分かつて

くる。

ぐつたりと壁に寄りかかり、身動き一つしない。

死んでいるのだろうか？

サツキは好奇心からそれに近づいてしまった。

路地が暗いためそれが男なのか女なのかすらよく分からない。

ゆつくりと、一応警戒はしながらもそれに近づいてく。

近づいてみるとそれが男であることが分かった。微かに風に靡く髪は金髪で、とても美しい。

サツキはその男の少し手前で止まり、ゆつくりとしゃがみこんだ。

随分と怪我をしているようだ。

男はわき腹に手をあてていて、そのわき腹からは血の流れた後がある。その他にも無数の傷があった。

これだけの怪我をしているのだ。やはり死んでいるのかもしれない。

サツキは男が生きているかどうか確認しようとしてそつと男の首筋に手を伸ばした。

そして、その手が男の首に微かに触れた瞬間。

「……っきゃー！！！」

男の瞳がカツと見開き、次の瞬間にサツキ視点は反転していた。ものすごい衝撃が背中に走り、声にならない声がサツキの口から

漏れる。

地面に叩きつけられたようだ。

「うう……ぐえっ」

男はサツキの上に乗ると、その両手で思いっきりサツキの首を締め付けた。

ギリギリと器官が締め付けられ、呼吸が出来なくなる。

「があ…… ああ」

だんだんとぼやけていく視界。

脳に酸素がまわらなくなっていく。生理的に涙が零れ落ちた。

男はサツキが非力な女であることが分かっているはずなのに、決してサツキを締め付ける力を緩めようとはしない。

ぼやけた視界の中でサツキは金色に輝く男の髪を見ていた。

“実はね、最近この辺に殺し屋が現れたんですって”

“なんでもすっごく綺麗な金髪の男だそうよ”

もしや……この男が……

「……………っ」

駄目だ

死ぬ……

金髪の男 - 2

サツキの命があと数秒というときだった。

「……っ!」

男は小さな声にならないような叫びをあげ、それと同時に首を締め付けていた指の力が緩まった。もちろん、サツキがその一瞬を見逃すわけがない。

サツキは足していた酸素を大きく取り込み、そのまま男の急所を蹴り上げた。男が自分から少し距離をとったうちにすばやく身を反転させて男のしたから脱出する。

そしてそのまま立ち上がると、もう一度手に持っていたソレを男に向けたのだ。

「ぐ……っ!」

男の身体は一瞬固まり、そのあと地面に倒れこんだ。

サツキは倒れこんだ男の上にのしかかるとそのまま手に持っているソレを男の首筋にあて、荒い息を繰り返す。

「はぁ……はぁ、動かないで……ください。はぁ、次は……気絶するくらいの電力が流れます……」

サツキはそういいながら手に持つソレの感触を男に分からせるためにグイッと首筋におしこんだ。

サツキが手に持っているもの……それはこの世界の防犯グッズの

一つで、スタンガンなどに似ているだろう。電力を簡単に変えることができる優れたものだ。

あのととき、サツキは最後の力を振り絞ってバグからコレを取り出して男に当てたのだ。荒々しい取り方をしたから男に気付かれるかとも思ったが、男はあまり冷静な状態ではならしくサツキを殺すことに集中していて気付くことはなかった。

コレにもし気がつかれていたら……サツキは今頃死んでいただろう。

「はあ、わたしは……別に貴方に危害を加えようなんて思っていないません。……わたしはただ……貴方が生きているかどうか確認しようとしただけで、それ以外の目的なんてない。

とりあえずサツキは男に落ち着いてもらおうと思い、そう口にした。男は何かしら反撃をしてくるかと思ったが反応はない。

反撃されたらされたで、今度こそサツキの命はないので良いのだが……

しばらく待つても男は動こうとしなかった。

何かおかしくないだろうか？

そう考えたサツキは、恐る恐る男にスタンガンもどきを向けたままその顔を覗き込んでみた。

「……え？」

さすがのサツキも驚いてしまった。男はぐったりと顔を地面につけたまま動こうともしない。

恐くなって開いているほうの手を男の口元に近づけてみると微か

ながらに息はしていた。

生きている……。サツキはそのことに安心して小さく息をついた後、ゆっくりと警戒しながら男の上から退いてみた。

それでも男は動かない。スタンガンもどきも外すがやはり男は起きなかった。

どうやら気絶しているらしい。

サツキはついつい自分が手に持つソレに目を向けて電気の量を確認した。とはいってもさつきスイッチを動かしてしまったので、男に2度目の電流を浴びせたときの電流の量などわかるはずもない。

もしかしたら間違ってしまったのかもしれないと思うと男に申し訳ない気持ちになった。

「どうしょ……」

サツキは動かなくなった男を見つめこれからのことを考えた。一度動かしてみようと試みたがさすがに力のないサツキがこんな大きな男をそんなに遠くまで移動させることなどできるはずがない。なんとか人目につかなそうな物影につれてきたもののソレが精一杯だった。

一度、自分を殺そうとした人間などほっておけば良いのでは？と考えたがサツキの良心がどうもそれをさしてくれなかった。だからといって彼を起こすほどの勇気もなく、サツキは考えたすえ、一度町に引き戻し安めの店から大きめのタオルケット購入すると男にかけてやった。

それから、男の体中の傷を軽く手当てしておく。本当に軽くだが

最後に“気絶させてしまったお詫びです”とだけ書いた置手紙を

のこすとサツキは立ち上がった。

自分ってかなり親切な人間だったんだなと思いながら、男の金髪を眺める。

サラサラと微かな風に揺れる髪はとても美しい。この男が本当に殺し屋だとしたら……

相手がかなりの手負いでよかったと思う。殺しのプロに女の自分が勝てるはずがない。いや手負いであったからといっても勝てる確立はかなり低かっただろう。

サツキは自分の運のよさに感謝した。

フツと空を見上げればそろそろ夕方になりそうだった。ずいぶんとこの男の看病に時間がかかってしまったらしい。

本当はまだ少し心配であるが、これ以上ここにいるわけにもいかない。

もう少しでレイが帰ってきてしまうかもしれない。

こんな場所に長くいたせいもあり服は汚くなり、髪も砂のせいでバサバサだ。こんな姿をレイに見られたら絶対心配されるし、問い詰められるだろう。

だからといってこの男のことをレイに言うのはどうよくないことのように思えた。

レイより早く帰って風呂に入らなければいけない。

そう思ったサツキは最後にもう一度金髪の男に目を向けると自分の家に向かって走り出した。

金髪の男 - 3

「どうかしたか？」

リビングのソファに座っていると、レイが心配そうに声をかけてきた。

サツキはどうしてそんなことを聞かれているのか分からず首を傾げる。

「さつきから随分と外を気にしている。何かあるのか？」

そう言つてレイは窓の外に目を向けた。

つられるようにサツキもそちらに目を向ける。

バレないようには思っているけど結局はレイにばれてしまうようだ。

サツキはずっとあの男のことを心配していた。

この地域の夜は寒い。ましてあの男はかなりの薄手であつたし、サツキがかけてあげたタオルケットも安物であるためたいして温かくもないだろう。

こんな中でまだ気絶していたら……そう考えると心配でならなかった。

サツキのせいで死んでしまったのではかなり後味が悪い。

たとえ……この世界では当たり前のように毎日人が死んでいたとしても、だ。

「ちい、聞いているのか？」

何の反応も示さないサツキを不思議がってレイはそう聞いてきた。サツキは窓の外に向けていた視線をレイに戻すと、傍らのテーブルに置いてあったホワイトボードを手にとり、サラサラとそこに文字を書く。

『今日捨て犬を見かけたの。寒くて死んでないか心配』
「そうか……」

サツキの言葉を読んで、レイはたいして反応を見せなかった。別段いつもと変わらない反応なのでサツキは気にしない。レイが反応を見せるのはサツキの命が深く関わっている場合だけだ。

そんなレイをみてサツキはチラリとあることを考えると、さつき書いた字を消して次の言葉を書いた。

『様子を見に行つては駄目？』

その言葉に視線を向けたレイは、すこし不機嫌そうな顔をした。

「外は寒い。風邪をひいてしまうだろう？明日でもいいじゃないか」

『明日行つて死んでいたらどうすればいいの？』

「命なんてどうせいつかなくなる。それが早いか遅いかという違いだけだ。明日行つて死んでいたら、自分を守りきれなかったその犬が悪い。ちいのせいじゃない」

命を軽く扱うレイ。そんなことは知っていた。たぶん職業柄よけいにそう思ってしまうこともちゃんと分かっていた。だけど、どうしてだか今日は無性に腹がたって仕方がなかった。

持っていたホワイトボードを振り上げて思いっきりレイと叩きつけると、サツキは自分のかばんを手にとって勢いよく走り出した。

「ちい！！」

後ろでレイが叫ぶ声が聞こえたが気にしない。分かってくれないレイはいけないのだ。

エレベーターを待っていたら追いつかれるのは目に見えていたので、サツキは一目散に非常階段へと向かいそれを駆け下りた。

外の冷たい風がサツキを包み込む。

せめてコートを持ってくればよかった。外が寒いとあれほど自分で言っておいてこんな薄着のまま出てきてしまうなんて馬鹿としか言いようがない。

サツキはギュツと自分を抱きしめながらあの男がいるであろう場所へを目指して走り続けた。

「いない……」

サツキがその場所にたどり着いたとき、すでにあの男の姿はなかった。ついでに言えばサツキがかけてあげたタオルケットも置手紙も消えている。

誰もいないその場所に座り込むと、サツキは少しがっかりした気持ちになった。自分を殺そうとした人なのにもう一度会ってみたいと心のどこかで思っていたのだ。

しかしそれと同時に安堵のような感情もある。ここで死んでいた

ら死んでいたできつとかなり後悔したであろうから、無事にここからいなくなったならそれは良かったのだろう。

サツキはしばらくその場にいたが、自分の心にフツきりをつける
と勢いよく立ち上がった。レイにも悪いことをしてしまった。レイ
に悪気がないことくらい分かっている。早く帰って謝らなければ…
…。きつと心配して探してくれているだろう。

そう思つて家へと帰ろうとしたその時だった。

「こんなところで何しているの？」

妙に悪寒が走った。振り返ってみれば見るからに柄の悪い男が数名。
名。

夜になれば昼間以上に治安の悪い場所だ……。こんなこと予想で
きていたはずなのに。

そう思いながらサツキは数歩下がる。

「何で逃げるの？俺たちはただお話ししようと思っただけなのにさ
あ」

そう言つて一人の男がサツキの腕を掴んだ。

「離して！」

男を睨みつけながらそういうが、相手はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべるだけで離そうとしない。こうなったらと思い、あいている手でバッグの中からあのスタンガンを取り出そうとするがその手は簡単に他の男に掴まれてしまった。

「おーつと危ない。最近は何騒な物持っている女が多いからなあ」

サツキはニタニタとする男を見て舌打ちをしたくなった。この状況、ものすごくよくないことはサツキにも十二分わかっている。

きつとレイはこの近くにいるだろうが助けを求めて叫ぶわけにも行かなかった。

そんなことをしたらサツキが言葉をしゃべてないペットのような存在ではなくなってしまう。

どうにかして逃げられないかと思うが、男の力にサツキが叶うはずもなく……

「さあーと一緒に遊ぼうか？」

サツキにできることと言えば、運よくレイが自分を見つけてくれるように天に祈るだけだ。

助けて、レイ……

金髪の男 - 4 (前書き)

多少流血してますのでお嫌いな方は戻ってください

金髪の男 - 4

たぶんサツキが目を閉じたのと同じくらいであろう。

大きな破裂音が聞こえた。

それと共にサツキの腕を掴んでいたがスルリと緩まり、生暖かいものがサツキの手にピチャリとつく。

「わああああ、うわああああああああ」

びつくりとしてサツキが目をあけると、自分の腕を掴んでいた男は目の前で叫びながらのたうちまわっていた。

その片腕からは大量の血が流れ出す。

男の仲間も分けが分からないとでも言うように周りをキョロキョロとするが、自分たちを攻撃した自分の姿はどこにも見当たらない。

サツキは一瞬レイが助けに来てくれたのかと思ったが、すぐに違うと思った。

もしレイだったらすぐにでもサツキの前に姿を現すだろうと思うたからだ。

しかし今攻撃してきた人物は一向に出てこない。
ということはレイである可能性は低い。

なら一体誰が？

「おっおい。やべっえって、逃げようぜ」

「あっああっ」

正体の分からない敵に恐れをなしたように男たちは逃げ腰だ。
腕から血を流し、痛みと恐怖で混乱しているその男を二人の何とか引つ張りながらこの場から逃げようとしている。

そんなこと、させるはずがないであろう。
サツキはすばやく自分の手を鞆に忍ばせた。

「うあつつつ！」
「おいっどうしっ！！っやめっがぁ」

微かに痙攣しながらその場に倒れた男たちをサツキは冷めた目で見つめる。

そして手にもったスタンガンもどきのスイッチを力チリと切った。

ふわりとサツキの黒髪がゆれ、夜の世界によく映える。

サツキはしばらく倒れこむ男たちを見つめていたが、フッとその顔をあげた。

もついないであろう。

そう思いながらも一つ一つの建物に丁寧に視線を惑わし自分を助けてくれたであろう人物を探していく。しかしそんな人影は一つもなく、当たり前かと思い顔を下げようとしたそのとき、

夜闇にまっ金色がサツキの視界に写りこんだ。

「っ！」

その金色は今にも視界から消えそうで、サツキは思わず声を出そ

うとする。

しかし、それは自分を包み込んだ大きな温もりに打ち消された。

「……ちい」

サツキを後ろから包み込むように抱きしめるレイは声はいつもよりも低い。サラサラと揺れるサツキとおそろいの黒髪もどこか悲しそうだった。

サツキはチラリと先ほど金色が見えた方向を見てみるもののそこにはもうその面影すら残っていない。

ため息をつきそうになりながら何とかそれを止めて視線を自分を抱きしめているレイに戻した。

手を伸ばしてその黒髪に触れてみると、ぎゅっとサツキを抱きしめる力が強くなる。

どうやらかなり心配させてしまったようだ。

こういうとき、声があつたらと思う。

『ごめんねレイ。大丈夫だから……心配させてごめんね』

言いたくても言えない言葉。

サツキはその思いが少しでも伝わるようにとそっとレイの頬を撫でた。

しばらくの間レイはサツキを抱きしめていたが、フツと目の前に倒れこむ男たちに視線を向けるとサツキを抱きしめる力を少し緩め

る。

「ちいが全員？」

男たちを見ながらかなり低い声でそう聞いてくるレイにサツキはふるふると首を振った。そして腕から血を流す男を指で示す。

サツキの指を目で追ったレイはチラリとその傷口に目を向けるがすぐに反らした。

「アレ以外はちいだな」

その言葉には頷いた。

それを確認するとレイはポケットから携帯電話を取り出してどこかにかけて始める。

「ああ俺だ……少し頼みたいことがある」

淡々とした口調。

サツキに話しかけるときの優しさと温かみなんて全くない。

これは仕事のレイだ。

サツキはその事を確認すると聴覚を意図的に閉ざそうとする。仕事のレイはサツキが知ってはいけない。

サツキは自分の思考を紛らわそうとして倒れている男たちにもう一度視線を向けた。

そしてその視線は一点へと向けられる。

いまだに血を流す男。止血をしていないからもしかしたらこのまま死んでしまうかもしれない。

あのと看見えた金色。

そこから連想できるものは一つしかない……

あの金髪の男だ。

でもこの世の中に金髪の男なんて五万といるだろう。

何もあの男とは限らない。それにさっきわたしを殺そうとした男だ。

わたしを助ける理由がわからない。

だけど……

あの男であつたらいいと思うのはどうしてだろうか？

「ちい」

いきなり聞こえた声にビクツとしながらも、サツキは振り返つた。そこにはいつもと同じように温かい表情をみせるレイがいる。どうやら仕事は終わつたらしい。

「疲れただろう？ 一回家に帰つて、話はそれからしよう」

そういわれてサツキは頷いた。

レイはサツキの肩に大事そうに手を添えるとそつとその肩を押す。

サツキは最後にチラリと金髪が見えたほうを見た。しかし何度見たつてそこには何もなない。

サツキはあきらめるように前を向くと、そっとレイに寄りかかった。

いつもの体温のレイに心が落ち着いていくのが分かる。
そんなサツキの肩をレイもぎゅっと抱きしめた。

ふわりと夜に舞う二人の黒髪。

そんな二人を見つめる影が一つ……

金髪の男 - 5

「おっお願いだっ！もう許してっぐがお」

男の悲痛な声とともに飛び散る赤い液体。

男の身体はそのまま壁に激突したが……まだ死ねない。

荒い息を繰り返しながらゆっくりと瞳を開けると、グイッと髪の毛をつかまれ顔を無理やり上げさせられた。

「クククッ」

とつくにぼやけて白くなっている視界の中で、妙に際立って見える赤。

自分を掴みあげるその男への恐怖心から身体が震えた。

「お前はなかなか根性あるな……他のやつは直ぐに駄目になって詰まらなかった」

赤い……血のように赤い瞳が楽しげに細められる。

「他の奴の分もお前に償ってもらうからな」

そう言った瞬間、男は軽く腕を振り上げる。

「があああああああああつつっ！……！！」

飛び散る赤。

「怨むなら、俺のものに手を出した自分たちを怨め」
「ぎゃっぎつあああ」

男の叫び声は誰に聞かれることもなく……

「どこ行くの?」

全身を赤に染めたその男は扉から外に出ようとしてフツとその声に足を止めた。

振り返れば銀髪に紫の瞳の優しげな男がこちらを見ている。

「まずさあ、シャワーを浴びることをおススメするよ。その見た目じゃ外に出ることなんて出来ない」

銀髪の男に言われて、自分の姿を見ると確かに酷い有様だった。
しかし、

「別にまたすぐ汚れる」

体中にこびり付いた赤を嫌そうに見つめた後、小さく呟いた。

「なに?アレだけヤツといてまだ足りないの?」
「……………イライラする」

男の赤い瞳が不機嫌そうに細められた。
それとは逆に、銀髪の男の瞳は愉快げである。

「別にリストに載ってるのだったらご自由にどうぞ。だけど間違っ
て一般人を殺さないようにね」

その言葉を背に、男はまた歩き出そうとしたが、

「あーちよつと待って」

まだ自分を引きとめようとする声。

彼は苛立ちつい自分の腰に刺さっていたナイフを投げつける。

「おっと」

銀髪男は大げさに驚いてみせると、自分に向かって飛んでくるソ
レをフワリとかわしてニヤリと笑った。

「危ないなあもう」

肩をすくめてそう言う銀髪を男は無表情に見つめる。銀髪に避け
られて当然というような態度だ。

「別にヤルのは自由だけど、シャワー、浴びてった方がいいよ」
「だから」

「じゃないとかなり残るよ？」

銀髪の髪がサラリと揺れ、紫の瞳が細められる。

「君は構わないかもしれないけど、あの子はどうか……?」

男はその言葉にもう一度自分の姿を見た。

「素直だねえ」

無言でシャワールームに向かう男をみて、銀髪は可笑しそうに笑った。

「サツキ?何か探してんの?」

「えっ」

リックに言われてサツキは初めて自分が窓の外ばかりを気にしていることを知った。

「うん……ちょっと猫をね」

「猫?」

サツキはいいながらもう一度窓の外に目を向けた。

金髪の人を見るたびに、自分の心臓がドクリと動くのを感じる。

あの男のはずがないのに……

「捨て猫を見つけたんだけど……どこかに行っちゃったの。怪我をしてたから大丈夫かなあって思って」

「ふうーん」

リックはそう言っていると自分も窓の外に目を向けた。

「こんな人ごみの中から見つけるのなんて無理じゃね？」

確かに無謀なことなのかもしれない。

「すごく綺麗な毛並みの猫だったから……見つけられるかなあって思ったんだけどね」

「へえ……何色なの？」

「ん〜」

それでも奇跡が起こることを期待せずにはいられなかった。

「金色……」

「はあ？金の猫？」

どうしてこんなに会いたいのだろうか？

殺されかけたのに、もしもあの男が弱ってなければ死んでいたかもしれないのに

こんなにももう一度会いたいと願うのはどうしてなのだろうか？

「金の猫って……まあ遺伝子組み換えで出来た金持ちどもの観賞用猫にはいるけどよお。そんな猫もう他の誰かが見つけて売っちゃうよ」

「そうだよねえ……」

サツキはそれでも窓から目を離せなかった。

「もうきつと、他のどこかに行っちゃったんだろーなあ……」

落ち込み気味のサツキをみてリックはどうしたものかと頭を悩ませる。

「ああーほらっ、猫って気まぐれだからさ、もし誰にも捕まっていなければ案外サツキが拾ったところに戻ってきてるかもしれないし……そうじゃなくてもきつと優しい金持ちに大切にされてるって、きつと」

「……」

リックの言葉を聞いて、サツキはじいと彼を見つめる。そのことにリックはほんのりと頬を染めた。

「リック……」

「なっなんだよ」

サツキはガタリと椅子から立ちあがった。

「わたしちょっと行ってくる！」

「えっ、マジで見に行くのかよ、じゃあ俺も」

「リック、アンタは仕事の最中でしょ？いつまでも遊んでないで仕事なさいな」

「なっ……リラさん、ひでえよ」

そんな声を背にサツキは店を出た。

そしてそのままあの金髪の男を見かけた路地裏に走る。

いるはずない。そう思っているにも足はその場所にいそぐように向かっていく。

人通りの少ない、少し治安の悪い道。

そこを少し進んだところが、彼と出会った場所……

サツキはその場につくと小さく息を呑んだ。

金髪の男 - 5 (後書き)

現在連載休止しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889o/>

夜に溺れて、月に縋る。

2011年2月26日13時52分発行